

隨想

水戸勝田支部 澤畠 寛(機16)



同窓とは何か。ある人は、自分を育ててくれた心の故郷であると言い、またある人は、何物にも替え難い無形の資産であるとも言う。何れもその真髄を突いている言葉だと思う。

人格形成の成長期の生活体験を共有し、未熟ではあるが共に理想を追い求めた心の交流、そこには個人の利害や打算、あるいは世俗の弊風といったものが、入り込む余地のない純粋さのみがある、このような人間関係が同窓であろう。

去る2月15日、母校発祥の地茨城大学工学部において、水戸勝田支部山本支部長の斡旋により、第1回多賀工業会茨城懇談会がもたれたことは、同窓という人間関係を見直し、同窓会の復興をはかる上で、誠に意義深いものがあった。

さて、「最もよく奉仕する者は、最もよく報いられる」という警句は、1950年米国デトロイド市で催された国際ロータリーの年次大会で、スローガンとして採択されたアーサー・シエルドンの言葉である。そして、「超我の奉仕」が、ロータリーの理想として永遠に追い求められている。

また新約聖書のマテオ伝のタレントの教えには、人は誰しも神からタレント（才能）を授けられている故に、如何に処すべきかが示されている。しかし、神はみな一様には授けなかつたので、五つも六つもタレントを持っているいわゆる才色兼備の人もいる反面、たった一つしか授からなかつた人もいるのがこの世の中である。しかし、一つもタレントを授からなかつた人は、この世の中に誰一人としていないと言う。そして、これらのタレントは、何れも神がその人をして、他人のため世間のために尽すように恵んだものである。したがつて、自分のタレントの数多きを誇ることは勿論、一つしかないタレントを卑下することは、厳しく戒められなければならない。人はみな神から恵まれたタレントを、自分のためではなく他人のため、世の中のために捧げることが、神のみ心中にかなうことであるという。

同窓会は、このような先天的あるいは後天的なタレントをもつた、同窓生の集りである。多賀工業会の同窓生のタレントの総和が、わが国の工業会に与える影響は、逐年大きくなっている。このようなときに、同窓生の連帯の輪を拡げ、協調発展してゆくならば、非常に大きな力として、「超我の奉仕」の理想に近づくこともできるのではないだろうか。

わが国の諺にも、「情は人のためならず」とあるが、己

を無にして人や世のために尽すという心の源泉として、同窓会のもつ今日的意義は大きい。友の憂いにわれは泣き、わが喜びに友は舞うという、お互いの青春の人間関係をいつ迄も大切にしてゆきたい。